

卑怯者

有島武郎

青空文庫

青黄ろく澄み渡つた夕空の地平近い所に、一つ浮いた旗雲には、入り日の桃色が静かに照り映はえていた。山の手町の秋のはじめ。

ひた急ぎに急ぐ彼には、往來を飛びまわる子供たちの群れが小うるさかった。夕餉ゆうげ前のわずかな時間を惜しんで、釣瓶つるべ落としに暮れてゆく日ざしの下を、彼らはわめきたてる蝙蝠こうもりの群れのように、ひらひらと通行人にかかけかまいなく飛びちがえていた。まともに突つかかつて来る勢いはずすために、彼は急に歩行をとどめねばならなかつたので、幾度も思わず上体を前に泳がせた。子供は、よけてもらったのを感じもしない風で、彼の方には見向きもせず、追つて来る子供にばかり気を取られながら、彼の足許

から遠ざかつて行つた。そのことごとく利己的な、自分よがりなわがままな仕打ちが、その時の彼にはことさら憎々しく思えた。彼はこうしたやんちや者の渦うずまき巻の間を、言葉どおりに縫うように歩きながら、しきりに急いだ。

眼ざして来た家から一町ほどの手前まで来た時、彼はふと自分の周囲にもやもやとからみつくような子供たちの群れから、すかんと静かな所に歩み出たように思つて、あたりを見廻してみた。

そこにも子供たちは男女を合わせて二十人くらいもいるにはいたのだつた。だがその二十人ほどは道側の生垣のほとりにひとかたまたま一塊

りになつて、何かしやべりながらも飛びまわることはいらないでいたのだ。興味の深い静かな遊戯にふけつていたのであろう。彼が

そのそばをじろじろ見やりながら通つて行つても、誰一人振り向いて彼に注意するような子供はなかつた。彼はそれで少し救われたような心持ちになつて、草履ぞうりの爪つまさきを、上皮だけ播まきみず水みづでうんだ堅い道に突っかけ突っかけ先を急いだ。

子供たちの群れからはすかいにあたる向こう側の、格子戸こうしど立たての平家ひらやの軒のきさきに、牛乳の配達車が一台置いてあつた。水色のペンキで塗りつぶした箱の横腹に、「精乳社」と毒々しい赤色で書いてあるのが眼ひを牽ひいたので、彼は急ぎながらも、毒々しい箱の字を少し振り返り返り気味にまでなつて読むほどの余裕をその車に与えた。その時車の梶かじ棒ぼうの間から後ろ向きに箱よに倚よりかかつているらしい子供の脚を見たように思つた。

彼がしかしすぐに顔を前に戻して、眼ざしている家の方を見やりながら歩みを早めたのはむろんのことだった。そしてそこから四、五間も来たかと思うころ、がたんとかけがねのはずれるような音を聞いたので、急ぎながらももう一度後を振り返って見た。しかしそこに彼は不意な出来事を見い出して思わず足をとめてしまった。

その前後二、三分の間にまくし上がった騒ぎのいちぶしじゆう一伍一什を彼は一つも見落とさずに観察していたわけではなかったけれども、立ち停どまった瞬間からすぐにすべてが理解できた。配達車のそばを通り過ぎた時、梶棒の間に、前扉に倚よりかかって、彼の眼に脚だけを見せていた子供は、ふだんから悪いたずら戯が激しいとか、愛あいきよ

嬌うがないとか、引つ込み思案であるとかで、ほかの子供たちから隔てをおかれていた子に違いない。その時もその子供だけは遊びの仲間からはずれて、配達車に身をもたせながら、つくねんと皆んなが道の向こう側でおもしろそうに遊んでいるのを眺めていたのだらう。一人坊ひとりぼつちになるとそろそろ腹のすいたのを感じたしでもしたか、その子供は何の気なしに車から尻を浮かして立ち上がろうとしたのだ。その拍子に牛乳箱の前扉のかけがねが折れ悪しくもはずれたので、子供は背中から扉の重みで押さえつけられそうになった。驚いて振り返って、開きかかったその扉を押し戻そうと、小さな手を突っ張って力んでみたのだ。彼が足を停めた時はちょうどその瞬間だった。ようよう六つぐらいの子供で、

着物も垢じみて折り目のなくなつた紺こんの単衣ひとえで、それを薄寒そうに裾短すそに着ていた。薄ぎたなくよごれた顔に充血させて、口を食いしばつて、倚よりかかるように前扉に凭もたれている様子が彼には笑止に見えた。彼は始めのうちは軽い好奇心にそそられてそれを眺めていた。

扉の後には牛乳の瓶びんがしこたましまつてあつて、抜きさしのできる三段の棚の上に乗せられたその瓶が、傾斜になつた箱を一気にすべり落ちようとするので、扉はことのほかの重みに押されてゐるらしい。それを押し返そうとする子供は本当に一生懸命だつた。人に救いを求めることすらし得ないほど恐ろしいことがまくし上がったのを、誰も見ないうちに気がつかないうちに始末しな

ければならないと、気も心も顛倒てんとうしているらしかった。泣きだす前のようなその子供の顔、……こうした suspense の状態が物の三十秒も続けられたろうか。

けれども子供の力はとても扉の重みに打ち勝てるようなものではなかった。ああしているとやがておお事になると彼は思わずにはいられなくなった。単なる好奇心が少しぐらつきだして、後あと戻りしてその子供のために扉をしめる手伝いをしてやろうかと思つてみたが、あすこまで行くうちには牛乳瓶がもうごろごろと転げ出しているだろう。その音を聞きつけて、往來の子供たちはもとより、向こう三軒両隣の窓の中から人々が顔を突き出して何事が起こったかどこつちを見る時、あの子供と二人で皆んな

の好奇的な眼でなぶられるのもありがたい役廻りではないと気づかたったりして、思ったとおりを実行に移すにはまだ距離のある考えようをしていたが、その時分には扉はもう遠慮会釈もなく三、四寸がた開いてしまっていた。と思う間もなく牛乳のガラス瓶があとからあとから生き物のように隙を眼がけてころげ出しはじめた。それが地面に響きを立てて落ちると、落ちた上に落ちて来るほかの瓶がまたからんからんと音を立てて、破れたり、はじけたり、転がったりした。子供は……それまでは自分の力にある自信を持って努力していたように見えていたが……こういうはめになるとかつとあわて始めて、突っ張っていた手にひときわ力をこめるために、体を前の方に持って行こうとした。しかしそれが失敗

の因もとだった。そんなことをやったおかげで子供の姿勢はみじめにも崩くずれて、扉はたちまち半分がた開いてしまった。牛乳瓶はここを先途せんどとこぼれ出た。そして子供の胸から下をめった打ちに打つては地面に落ちた。子供のうわまえ上前にも地面にも白い液体が流れひろ拡がった。

こうなると彼の心持ちはまた変わっていた。子供の無援むえんな立場を憐あわれんでやる心もいつの間にか消え失せて、牛乳瓶ががらりからりととめどなく滝のように流れ落ちるのをただおもしろいものに眺めやった。実際そこに惹じゃつき起された運動といい、音響といい、ある悪魔的な痛快さを持っていた。破壊ということに対して人間の抱いている奇怪な興味。小さいながらその光景は、そうした興

味をそそり立てるだけの力を持っていた。もつと激しく、ありつたけの瓶が一度に地面に散らばり出て、ある限りが粉微塵こなみじんになりでもすれば……

はたしてそれが来た。前扉はぱくんと大きく口を開いてしまった。同時に、三段の棚が、吐き出された舌のように、長々と地面にずり出した。そしてそれらの棚の上にうんざりと積んであつた牛乳瓶は、思ったよりもけたたましい音を立てて、壊れたり砕けたりしながら山盛りになつて地面に散らばつた。

その物音には彼もさすがにぎよつとしたくらいだった。子供はと見ると、もう車から七、八間のところを無二無三に駈かけていた。他人の耳にはこの恐ろしい物音が届かないうちに、自分の家に逃

げ込んでしまおうと思ひ込んでいるようにその子供は走っていた。しかしそんなことのできるはずがない。彼が、突然地面の上に現われ出た瓶の山と乳の海とに眼を見張った瞬間に、道の向こう側の人垣を作つてわめき合つていた子供たちの群れは、一人残らず飛び上がらんばかりに驚いて、配達車の方を振り向いていた。逃げかけていた子供は、自分の後に聞こえたけたたましい物音に、すくみ上がったようになつて立ち停つた。もう逃げ隠れはできないと観念したのだろう。そしてもう一度なんとかして自分の失敗を彌縫する試みでもしようと思つたのか、小走りに車の手前まで駈けて来て、そこに黙つたまま立ち停つた。そしてきよろきよろとほかの子供たちを見やつてから、当惑し切つたように瓶の積み

重なりを顧みた。取って返しはしたものの、どうしていいのかその子供には皆目見当がつかないのだ、と彼は思った。

群がり集まって来た子供たちは遠巻きにその一人の子供を取り巻いた。すべての子供の顔には子供に特有な無遠慮な残酷な表情が現われた。そしてややしばらく互いに何か言い交していたが、その中の一人が、

「わーるいな、わるいな」

ときも人の非を鳴らすのだという調子で叫びだした。それに続いて、

「わーるいな、わるいな。誰かさんはわーるいな。おいらのせいじゃなーいよ」

という意地悪げな声がそこにいるすべての子供たちから一度に張り上げられた。しかもその糺きゆうもん問もんの声は調子づいてだんだん高められて、果ては何処どこからともなくそわそわと物音のする夕暮れの町の空気が、この癩かんだか高たかな叫び声で埋められてしまうほどになつた。

しばらく躊躇ちゆうちよしていたその子供は、やがて引きずられるように配達車の所までやって来た。もうどうしても遁のがれる途みちがないと覚悟をきめたものらしい。しよんぼりと泣きも得せず突つ立つたそのまわりには、あらん限りの子供たちがぞろぞろと跟ついて来て、皮肉な眼つきでその子供を鞭むちうちながら、その挙動の一つ一つを意地悪げに見やっていた。六つの子供にとって、これだけの

過失は想像もできない大きなものであるに違いない。子供は手の甲を知らず知らず眼の所に持つて行つたが、そうしてもあまりの心の顛倒てんとうに矢張り涙は出て来なかつた。

彼は心まで堅くなつてじつとして立っていた。がもう黙つてはいられないような気分になつてしまつていた。肩から手にかけて知らず知らず力がこもつて、唾つばをのみこむとぐつと喉が鳴つた。

その時には近所合壁から大人おとなまでが飛び出して来て、あきれた顔をして配達車とその憐あわれな子供とを見比べていたけれども、誰一人として事件の善後を考えてやろうとするものはないらしく、かわり合いになるのをめんどくさがつているように見えた。そのていたらくを見せつけられると彼はますます焦いらだ立つた。いきなり

飛びこんで行って、そこにいる人間どもを手あたりしだいになぐりつけて、あつけにとられていている大人子供を尻眼にかけながら、

「馬鹿野郎！ 手前たちは木偶でくの棒だ。卑怯者ひきょうものだ。この子供がたとえばふだんいたずらをするからといって、今もいたずらをしたとも思っているのか。こんないたずらがこの子にできるかでないか、考えてもみろ。可哀そうに。はずみから出たあやまちなんだ。俺おれはさつきから一伍いちぶ一什しじゅうをここでちゃんと見ていたんだぞ。べらぼうめ！ 配達屋を呼んで来い」

と存分に痰たんか呵かを切つてやりたかった。彼はいじいじしながら、もう飛び出そうかもう飛び出そうかと二の腕をふるわせながら青くなつて突つ立つていた。

「えい、退きねえ」

といつて、内職に配達をやっている書生とも思わしくない、純粹の労働者肌の男が……配達夫が、二、三人の子供を突き飛ばすようにして人ごみの中に割りこんで来た。

彼はこれから気をつまるようないまましい騒ぎがもちあがるんだと知った。あの男はおそらく本当に怒るだろう。あの泣きもし得ないでおろおろしている子供が、皆んなから手柄顔に名指されるだろう。配達夫は怒りにまかせて、何の抵抗力もないあの子の襟がみでも取つてこづきまわすだろう。あの子供は突然死にそのうな声を出して泣きだす。まわりの人々はいい気持ちそうにその光景を見やっている。……彼は飛び込まなければならぬ。飛び込

んでその子供のためになんとか配達夫を言いなだめなければならぬ。

ところがどうだ。その場の様子がものものしくなるにつれて、もう彼はそれ以上を見ていられなくなってきた。彼は思わず眼をそむけた。と同時に、自分でもどうすることもできない力に引つ張られて、すたすたと逃げるように行手の道に歩きだした。しかも彼の胸の底で、手を合わすようにして「許してくれ許してくれ」と言い続けていた。自分の行くべき家は通り過ぎてしまったけれども気もつかなかった。ただわけもなくがむしやらに歩いて行くのが、その子供を救い出すただ一つの手だてであるかのような気持ち^{むしやう}がして、彼は息せき切つて歩きに歩いた。そして無^{むしやう}性に癩^か

んしゃく
癩を起こし続けた。

「馬鹿野郎！ 卑怯者！ それは手前のことだ。手前が男なら、今から取って返すがいい。あの子供の代わりに言い開きができるのは手前一人じゃないか。それに……帰ろうとはしないのか」

そう自分で自分をたしなめていた。それにもかかわらず彼は同じ方向に歩き続けた。今ごろはあの子供の頭が大きな平手でぴしゃぴしゃはたき飛ばされているだろうと思うと、彼は知らず識らず眼をつぶって歯を食いしばって苦い顔をした。人通りがあるかないかも気にとめなかった。噛み合うように固く胸高に腕ぐみをして、上体をのめるほど前にかしげながら、泣かんばかりの気分になって、彼はあのみじめな子供からどんどん行く手も定め

ず遠ざかって行った。

青空文庫情報

底本：「カインの末裔」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年10月30日改版発行

1988（昭和63）年6月10日改版23版発行

初出：「現代小説選集」

1920（大正9）年11月

入力：鈴木厚司

1999年2月13日公開

2005年11月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

卑怯者

有島武郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>